2022年8月7日  川越教会

丸山　勉

待ち望む人として

［エフェソの信徒への手紙6章10節～20節]

最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。どのような時にも、“霊”に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。また、わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の神秘を大胆に示すことができるように、わたしのためにも祈ってください。わたしはこの福音の使者として鎖につながれていますが、それでも、語るべきことは大胆に話せるように、祈ってください。

 [１] 勇ましい言葉

「エフェソの信徒への手紙」もご一緒に味わうのは最後の週になりました。今日の箇所はかなり勇ましく響いてきます。「最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。」と、この手紙の著者パウロは記します。エフェソの教会の人々よ、最後にこのことを言っておきたいということですが、ちょっと引いてしまうことがないでしょうか。8月は「平和」を祈り、考える月ですけれども、それとは反対のような戦闘的イメージがここから感じてしまうということがあると思います。しかし「平和」と対比して言われる「戦争」ということではなくて、パウロは、信仰を抱いてこの世を生きるということは、霊的な戦いなのだということを語っていると思います。事実パウロは、テモテへの手紙一の6:12で「信仰の戦いを立派に戦い抜きなさい」と語っています。今日のエフェソの箇所ではその戦いに必要な「武具」について言及をしている訳です。それでは、信仰の「戦い」とは一体何なのでしょうか。

6章11節で「悪魔の策略に対抗して立てるように」とありますが、悪魔は、私たちの「心」に働きかけてくる―決して派手ではなく、むしろ甘い囁きとして惑わしてくる―のだと思います。その後でこのようにパウロは書いています。「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。」

［２］ 「十字架」の言葉

この言葉を語る時、パウロは自分のことを振り返っていたと思います。悪魔とは、「イエスは主である」と言わせない様々な力のことだと彼は実感をしていたと思います。「イエスこそまことの神、救い主、まことの勝利者」と言わせない力。むしろ、あんなに惨めに死んでいった敗北者を崇めるなんて異常なことだ、イエスは確かにいい人であっただろう。理想高い優れた人物であったと思う。しかし、それではこの厳しい世を生きていけない。事実、イエスは見殺しにされたではないかと。パウロも、イエスを信じる者たちを目の敵にしていた訳です。大真面目にです。彼は自分の信心に熱心な人でした。しかし今振り返ると、その熱心さがかえって自分を不自由にしていた。彼は神様によって、自分は「暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊」に惑わされていたのだと悟ったのです。彼は、キリスト教徒たちを叩いている最中に「光」に打たれ、「光」に導かれて、その中で「イエスこそ主、この方こそ真の神」だと憚ることなく語るようになり、生き抜いていったのです。そして今もこの文書を通して、私たちを励ましているのです。

　彼は、自分自身がキリストの十字架によって、自分の罪が赦されていること、神様と和解させられていることを知りました。ですから彼は「十字架の言葉こそ、神の力」だと語りました（コリント一1:18）。この世界に「教会」があるのは、十字架こそが、本当の意味で「戦いが止む場所」であることを示すためではないでしょうか。十字架とは、いわば「神の無抵抗」です。敵対するのは私たち人間です。理想だけ語って何もできない男だと決めつけられた存在はもう不要なのです。「十字架につけよ」と叫びます。しかし、神様はその十字架のイエスを十字架から降ろされませんでした。神様が人間に敗れたかのように見える瞬間です。しかし、そのようにして神様は人間を愛され、私たちに下される裁きを全部このイエスの上に置かれたのです。イエスはその場で恨み言一つ言わず、ただ「父よ、彼らを赦して下さい。何をしているのか分からないです」と、神様に執り成し祈りました（ルカ23:34）。この祈りが支える世界が「神の平和」です！私たちはただこれを受け取ればよいのですね。

そうです、イエスの執り成しの祈りは、弱々しい祈りではなく、罪びとである私たちを丸ごと抱え込む神の愛の勝利の祈りです。そしてそれは「復活」によって決定的なものとなりました。十字架にかかられ、死んで葬られたイエスは、今、甦って、この世界を統治しておられるのです。この世界を愛し憐れむお方として。そして、私たちこの世を生きる信仰者を励ましていて下さっています。

［３］ 「勝利の時」を待ち望みながら

今日、招きの聖句で読んで頂いたテモテへの手紙二の1:6-7にはこうあります。「そういうわけで私が手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたたさせるように勧めます。神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をくださったのです」。神様の下さった霊、それは力と愛の霊。力だけでなく、愛がそこにある霊。そして「思慮分別の霊」とは、ある神学者は 「この世の力の無力さを見抜いている霊」のことだと言いました。それは素晴らしい解説だと思います。私たちに送られた聖霊は私たちの心に働いて、「暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊」に惑わされないようにしていて下さるのです。この世の権力者がどれほど悪の緒霊に巻き込まれてしまっているか、それは、例えば、この所明らかになってきた、旧統一教会と政治家との癒着のことからも透けて見えます。恐ろしいのは、そこに人間の思いを超えた悪いものが巧みに働いているように思えることです。サタンはいつも魅力的に囁くのです。

このような中で（5章では「悪い時代」だと言っている）、信仰者は全く無力に思えてしまいます。しかし、そうではないのですね。パウロは言います。私たちには神の武具があると。エフェソの信徒への手紙で恐らくパウロは、獄中からローマの兵士の姿を毎日見、そこからこの「信仰の武具」をイメージしたのだと思います。お読みしますと、「神の武具を身に着けなさい。立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい」。まずは「帯」です。帯は姿勢を作る根本的な備えですね。「わたしは真理であり命である」と言われたイエス様を「帯」とする。その上に「正義」を旗印とする「胸当て」、平和の福音を届ける足が履く「履物」、そして敵の矢を貫通させない信仰の「盾」、さらに冠のように「兜」を「救い」の徴として被ります。皆さん、私は読んでいて気が付いたのですが、これらは「武器」ではありませんね。「防具」です。クリスチャンは平和の福音、和解の福音をこそ告げ、そこに生きるのですね。言ってみれば‟専守防衛”です。しかしパウロは一つだけ「武器」となり得るものをここで語っています。17節「神の言葉を取りなさい」と。その前に「霊の剣、すなわち神の言葉」と言っています。体を傷つける武器ではありません。「霊の剣」なのです。聖霊が、神様ご自身が戦われる、ということです。

主イエス様があの荒野で悪魔の誘惑に遇われた時（マタイ4章）、それを退けられたのは主が引用された旧約聖書の言葉でした。石をパンに変える物質的な誘惑も、飛び降りても天使が支えてくれるから飛び降りてみろという神様を操る誘惑も、また自分にひれ伏したらすべてをお前にやるという最大権力への誘惑も、み言葉、霊の剣を持って退けられました。このイエス様の勝利によって、悪魔はもう背骨をへし折られてしまったのです。今は終わりの日・勝利の時がやって来る迄のはざ間の時間の中を私たちは生きているのだと思います。しかしそれは、サッカーで言えばもう10点以上差がつき、残り時間2、3分のようなものです。勝利を告げる笛が鳴るまでの時間を楽しみにしつつ、待ち望んでいればいいじゃないですか。「神の国」を私たち罪人に約束するためにイエス様はこの地上に人となって来て下さいました。私たちがすべきことは「待ち望むこと」です。その待望の中を、忍耐と愛の中で生きたいと思います。神様の武具を身に着けながら。

「イエス・キリストはきのうも今日も、また、永遠に変わることのない方です」（ヘブライ13:8）。イエス・キリストの福音こそ、いかなる時も私たちがただ一つ依り頼むべきものであり、パウロが言うように今は宣教の時なのです。私たちは聖霊に導かれて、今、目に見えない大きな「教会」の一員とされているのです。その事実を感謝しながら祈っていきましょう。第一の宣教は祈ることです。約束の日の訪れを楽しみにしながら、これからもご一緒に進んで参りましょう。お祈り致します。

　愛する主よ、8月最初の礼拝を感謝致します。

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かものですが、救われる者には神の力です」。どうぞ、様々な惑わし、誘惑が襲い、私たちをあなたから引き離そうとする時にも、あなたは真実な方です。十字架こそ私たちの依り頼む岩です。これから主の晩餐式にも与ります。そこでもあなたの愛の確かさをこの心と体に刻むことが出来ますよう、導いて下さい。この場に出席できない教会の仲間の一人ひとりにもあなたの恵みの力を注いて下さいますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。